

## 鹿屋夏祭り

着物や浴衣姿の市民がハンヤ節に合わせ軽やかにステップを踏む。目抜き通りを埋めた地域や職場、婦人会などの踊り連である。華やかな踊りの波は整然と数キロにわたって続く（「南日本新聞」記者の目）。

前夜祭に始まり、2日目の御神事、山車による市内パレードに続く「かのやハンヤ踊り」。最終日の3日目は夏の夜空を彩る花火大会など、真夏の夜に繰り広げられ、さわやかな涼風を呼ぶ鹿屋の夏祭り。

祇園祭が、いつごろから行われていたかよく分からないが、戦時中など一時途絶えていたようである。戦後の昭和25年ごろ、青年団によって夏祭りが行われるようになり、これがその後、商工会議所と鹿屋市の主催によって祇園祭として復活している。

商工会議所など関係者の努力、紆余曲折、試行錯誤の末、祇園祭に踊りを加え「鹿屋夏祭り」名付けられたのが昭和30年代の半ば、徳島県の「阿波踊り」を参考にして導入された。この踊りは、昭和38年の夏祭りに登場し、初めは「ばか踊り」の名称で、平成5年まで30年とう長い間市民に慕われ続けていたが、諸般の事情により平成6年に現在の「かのやハンヤ踊り」に変更されている。

当初の「ばか踊り」の名称も、鹿屋地方に伝わる「ばか<sup>ほぜ</sup>豊穰」「ばか相撲」に由来し、いろいろな面から考証し検討された経緯があり、それなりに意義がある名称であった。「ほぜ」は豊作を感謝する祭りであるが、豊穰・方祭・豊祭・放祭など表記も一定していない。

新しい名称「かのやハンヤ踊り」は鹿児島を代表する民謡「ハンヤ節」に由来するが、新しい時代の鹿屋を象徴する祭り、踊りとして、平成の大隅に未永く定着していくことだろう。



昭和40年代（北田交差点）